百々裏話（99）

おもて　あきら

――鉄之丞家代々（その八）――

◎観世鉄之丞清永〈紅雪〉（五代目）

鉄之丞家五代目の清永（キヨヒサ）は、天保14年（一八四三）10月5日、四代清済の長男として、京橋弓町の観世大夫宅に生まれた。父清済27歳の時の子で、幼名を太郎と称した。安政2年（13歳）4月15日の奥御能で合冑のシテを勤めたのが江戸城内での初演である。

同年9月8日に父が歿したが、翌安政3年5月4日、太郎清永への家督相続が許された。一代限りの名目で代々継承してきた拾人扶持（但在江戸中一倍）の他に、父が観世大夫代理を勤めて加増された配当米五十石をも相続している。同年12月21日の表能に初出勤して祝言能金札を舞った時にはまだ観世太郎であったが、安政6年（一八五九）3月19日、元服して鉄之丞を襲名した。数え17歳の時である。

観世大夫清孝の指導を仰いだらしいが、当時は幕末の混乱期で、江戸城内の能の催しも著しく減少し、活躍する機会が少なかったようである。それでも、22歳の元治元年には家芸の望月を披いている。

慶応三年頃に観世大夫宅を出て代々の拝領屋敷たる下谷小島町に別居したが、幕末の危機感にあおられて僚友と剣術に励み、また柔術をも習ったという（『能楽盛衰記』所収、観世元規談話等による）。『観世華雪雑談』所収の「父紅雪」には、〝父は私と違って大柄で二十貫近くもあったそうです。……いまの鉄之丞を一まわりも二まわりも大きくしたような立派な体格の持主でした〟とあるが、一方また、長刀ものを得意とし、斬組物の立衆頭を自分から買って出て、〝長刀を持ったまま音もささずに宙返りするなどの芸当を見せるのが得意でした〟ともあるから、大柄ながら体の利く芸であったらしい。青年時の武術鍛練が役立ったのかも知れない。

明治維新は26歳の時であった。大夫の清孝は将軍への恩義から慶喜の退いた静岡へ移住したが、鉄之丞は後事を托されて東京に留まり、明治2年7月29日の英国皇太子御覧能にも経政のシテを勤めている。しかし、かっての俸禄を失って生活に困窮し、その頃に小島町の家を畳んで、浅草南元町の梅若六郎（先々代。後に実と改む）宅へ同居した。鉄之丞より六歳年下の弟源氏郎氏演が慶応元年に梅若の養嗣子になっていた縁によるのであろう（弟の源氏郎は明治5年に梅若六郎を襲名したが、後に実に実子〈先代の万三郎と六郎〉が生まれた関係から梅若家を離れ、別家を立てて観世清之と称した。今の観世喜之家の祖であり、喜之家は鉄之丞家の別家にあたる）。

その後、鉄之丞は、能楽復興の中心となった梅若実と行動を共にすることになり、明治5年3月25日、梅若舞台最初の日数能の五日目には、観世流としては数十年ぶりの道成寺を披いた。翌年11月21日には恋重荷を披いてもいる。こうした習い物を披くにあたっては静岡在住の家元清孝に書状を送って免許を受けるのが常であった。梅若実らが演じる場合も、鉄之丞を通して家元へ願い出る形が採られていた。そのための書状数通が観世宗家に残されている。そうした関係もあってか、梅若実の明治初年頃の活動は何かにつけて鉄之丞を表に立てたようである。前述した日数能の番組（それには「勧進能」とある）も、観世鉄之丞と梅若六郎の連名の形になっている。

明治8年刊の『諸芸人名録』は、諸芸頭取世話方の筆頭に観世鉄之丞の名を挙げており、彼が能楽師の代表と見られていたことが知られる。明治9年4月4日の岩倉邸行幸能、11年7月5日の青山御所舞台開き能など、能楽復興の糸口となった催しにも欠かさず出演しており、14年に新築された芝能楽堂の演能記録では、望月をもっとも多く演じている。

明治13年に、鉄之丞は梅若宅から鳥越町に

移転した。梅若実の姪にあたる広田ユキ子と結婚したのはそれ以前のようである。初めの二子はともに女子で、長男織雄（六世銕之丞）が生まれたのは、17年11月14日、42歳の時であった。四男茂（現銕之丞）は、31年4月11日生れで、56歳の晩年の子である。

明治21年2月26日、宗家観世清孝が歿したが、臨終の直前に嗣子清廉の後事を託されている。清孝は明治8年頃から帰京して演能活動を再開していたが、宗家が預っていた銕之丞家の面装束類の処置などを廻って、静岡在住時代から本家と分家の間は少しく円満を欠くようになっていた。しかし、何と言っても分家であり、まだ若い清廉（当時22歳）の後援を依頼する人物としては鉄之丞が最もふさわしいと感じての清孝の依頼であったろうと思われる。

明治26年3月19日に51歳で卒都婆小町を披き、58歳の33年11月4日には秘曲姨捨を披いた鉄之丞は、64歳の39年10月21日、梅若舞台で通小町を演じている時に中風で倒れた。後にやや恢復し、41年5月3日には仲光の満仲を勤めた（最後の能）。43年1月には、清廉の養子となっていた清久（後の左近）の後見を依嘱されてもいる。しかしそれは、名目上のことで、実際の指導は梅若万三郎の担当であったらしい。同年8月1日に、鉄之丞の名を長男織雄に譲って隠居し、紅雪と称した。この雅号は、氷室に「それ仙家には紫雪紅雪とて薬の雪あり」とある文句から採ったものに相違あるまい。翌44年正月に「ほんのりと紅海あかし今朝の雪」の一句をものしたという。同年3月12日の梅若実三回忌追善能に江口を独吟したのが最後の舞台となり、四月に予定されていた鉄之丞襲名披露能を待たず、3月30日脳溢血で重態に陥り、翌31日午後8時半に死去した。享年69歳。戒名は観瀧院温誉清永紅雪居士である。

その死を報じる雑誌『能楽』（44年4月号）の彙報には、〃翁は幼少にて父に別れ、若年にて維新の大打撃を受け、逆境に立たれしこと有しも、屈せず撓まず常に芸道を守りて怠らず、謙譲敦厚の君子なりし故表面に立ちて数々の功を誇ること無かりしも、内助の功は量るべからざるものあり。観世流の今日あるは翁の力多きに居ると言うも敢て過言にはあらざるべし〃という。短句よく銕之丞紅雪の人柄を叙し得た文と思われる。『能楽画報』同月号にも死を悼む諸家の談話が見え、紅雪の篤実な人柄や略実な芸風が語られている。

（以上は、銕之丞家文書等に基づいて、昭和35年4月2日に催された「五世銕之丞紅雪五十回忌・六世銕之丞華雪一回忌追善能別会」のパンフレットに書いた「観世紅雪―略歴と人柄―」なる小稿に、若干手を加えたものである。）

◎**観世鉄之丞清実〈華雪〉**（六代目）

六代目の清実（キヨチカ）は明治17年（一八八四）生れ、初名織雄、父穏居に伴ない明治43年8月1日に銕之丞の名跡を嗣いだ。清実は銕之丞家としての芸名である。明治35年に梅若実の次女花子（後はま子と改む）と結婚したが子がなく、大正7年4月26日に弟の茂（紅雪隠居時に織雄と改む）を養嗣に定めた。銕仙会を設立したのは大正14年である。昭和22年3月、亡父三十七回忌に際し銕之丞の家名を養嗣子織雄に譲り、華雪と号した。27年6月には日本芸術院会員に任じられている。昭和34年（一九五九）1月6日、数え76歳で歿した。戒名、諦観院妍誉浄邦華雪居士。

大正の震災、昭和の戦災に逢い、いわゆる観梅問題の渦中にあった波瀾の生涯については『観世華雪芸談』所収の自伝に詳しい。生涯の演能記録も同書に収められ、高雅な芸風や温厚な人柄についても同書収録の弔辞等に明らかである。同書を参照されたい。

七代目の現銕之丞氏については、目下活躍中の人であり、記載を省略して、長く続いた本稿を終ることにする。（47・11・2）